

[資 料]

第 19 回・第 20 回 総合学術文化学会学術研究会の報告

編集：大 森 克 徳

第 19 回総合学術文化学会学術研究会は前号発行の直前（平成 28 年 12 月 3 日）に開催されたため、平成 29 年 3 月 10 日に開催された第 20 回総合学術文化学会学術研究会と併せ、本号に研究発表概要を掲載することとした。

なお、上記 2 回の学術研究会は、いずれも尾関英正会長の開会の挨拶の後、松本賢信副会長の司会進行により進められた。

以下に発表者から提供された研究発表概要を掲載する。ただし、第 19 回の Antonija Cavcic 講師「“Yuru Power”（ゆるパワー）」の研究発表概要については、発表者より本誌前号掲載の論文（Antonija Cavcic, (2016). 亜細亜大学学術文化紀要, 30, 11-34.）を参照されたいとの申し出があったため、本号に掲載しない。

第 19 回学術研究会

Antonija Cavcic（英語教育センター講師）「“Yuru Power”（ゆるパワー）」
浅野麗（経営学部講師）「石牟礼道子『詠嘆へのわかれ』が目指すこと
—— 1950 年代の石牟礼道子における短歌と文学的教養」

第 20 回学術研究会

安形輝（国際関係学部准教授）「亞書の謎 —— 読めない本に振り回された図書館」

小野永貴（千葉大学特任助教）「アクティブ・ラーニングを促進する学習環境づくりと授業支援の実践 —— 千葉大学アカデミック・リンク

での事例を中心に」

小川直之（経営学部准教授）「『トリスタンとイゾー』におけるドラゴン——女性へのイニシエーション」

第 19 回学術研究会研究発表概要

石牟礼道子「詠嘆へのわかれ」が目指すこと

— 1950 年代の石牟礼道子における短歌と文学的教養 —

浅 野 麗

本発表では、1950 年代、おもに 1953 年から 1959 年にわたって、『苦海浄土』の著者として知られる石牟礼道子（1927-）が、熊本県熊本市で発行されていた歌誌『南風』、そして全国誌の『短歌研究』に発表した短歌作品を読み直した。とりわけ、1950 年代の地方在住女性における短歌制作の意義を念頭に置き、石牟礼の短歌が、いかに女性の文学的意志を生成するものであったかという問いにもとづき、初出誌に掲載された短歌や、歌人としての石牟礼を評価する言説を検討した。

冒頭にも記したように、石牟礼道子の名は 1970 年代、その著作である『苦海浄土』を介して全国に知れ渡る。甚大な被害を受けた水俣病患者の魂の声を再現した作家として、それと同時に、1968 年以降の新しい社会運動である公害闘争に、市民として参加した女性としてである。このような作家イメージにおさまるように、彼女の作品は意味づけられることが多い。短歌も例外ではない。たとえば、石牟礼の同伴者ともいえる渡辺京二は、石牟礼が「生理的に文字以前の前近代の民のこころの世界」を知りぬき、「彼らが世界をどのように甘受して、どのように受け取っていたかということをもがまざと自分の感覚で再生できる」（「シンポジウム 石牟礼文学の多様性」『現代詩手帖』2014 年 10 月号）と述べ、この文脈を共有する小説家の池澤夏樹は「なぜ石牟礼道子に『苦海浄土』が書けたのだろうか？」と問い、石牟礼は「水俣に住む人々の幸福を知って」おり、「それ

が無残に失われたという事実が彼女を背後から押し」た。「その時々
の思いは詩や短歌や小品で表現していたのが、三十代になって自分の周囲の異
変に気づく。そこにおいて、これを書くという意思が生じる」（『不知火海
の古代と近代』、『苦海浄土 世界文学全集Ⅲ-4』2011年11月、河出書房新社）
と述べる。渡辺も池澤も、石牟礼が素朴な「民」であるために土地の「異
常」を感知でき、その感覚をこそ彼女の書く「力」の源泉とする。このよ
うな捉え方には問題がある。その一つ目は、書記行為の動機として、石牟
礼の優れた「感覚」や「力」を見出し、プリミティブな民に強く感応する
プリミティブな石牟礼像を描き出すことであり、聞き書きの場の権力関係、
代理表象の問題を書き手がどのように意識していたのかを不問に付すこと
である。その二つ目は、石牟礼の素朴さを示すために「詩や短歌」が位置
づけられることである。ゆえに本発表では、素朴な書き手である石牟礼表
象を補完するように扱われる「詩や短歌」、とりわけ「短歌」の位置づけ
を解除する意図において、その特徴について分析を試みた。

石牟礼は1952年、25歳のときに『毎日新聞』の「熊本歌壇」に投稿を
開始し、やがて、熊本県熊本市で短歌誌を発行していた『南風』が開催す
る歌会に参加した。1953年から1965年まで『南風』に所属し、その初期
には、毎月刊行される歌誌にもほぼ毎月のペースで短歌を発表する。1956
年に、その短歌は『『短歌研究』（短歌研究社）主催の「第四回新人五十首
詠」に入選」し、その力量は全国誌レベルで評価された。

ここで詳述はできないが、〈性愛〉をテーマとし、とりわけその場面
における受動的な性役割を持たされる女性の憂鬱をよみ、被傷性を強く示す
石牟礼の短歌であったが、それらは〈女流歌人〉の育成に力を入れた『南
風』で高く評価された。この後押しもあって、一地方の歌誌のみならず、
そこで生まれる中央歌人との人脈をたどるように発表作品数を増やし、そ
して石牟礼は、文学としての短歌を概念化するようになる。これらを追
跡する過程において、藤原書店版の石牟礼道子全集未収録のエッセイも発
見することができた。

ところで、短歌を含む短詩型文学は敗戦直後に「奴隷の韻律」（小野十郎）、「第二芸術」（桑原武夫）とも呼ばれた。敗戦から10年を経た1950年代、その短歌を表現の手段とすることへの石牟礼の自覚、そして、短歌制作を通して文学的意志を強めていく様相をたどることは、『苦海浄土』執筆以前において、石牟礼がどのような文学的教養を身につけていくのかを見出すことと同義である。言い換えれば、素朴な「民」としてではなく、文学への明確な意志を持って短歌制作を行っていたこと、そしてそこに、どのような具体的な知が蓄積されようとしていたのかをたどることと同義である。本発表は、このことを明らかにすることが目的でもあった。それは、あるところまでは成功しただろう。このことについて、少しだけ述べておこう。

石牟礼は『南風』掲載のエッセイ「とある独善の言」（『南風』1954年1月号）で、「「なりけり調」式の御家芸でなければ親不孝者扱ひをする因業おやじがある」と述べ、「平面的な言葉の抒情に安易に遊んでゐては嗤はれても仕方が」ない、「イメージをもつと動きのある立体に、一首の中にももつと展開を」と発言し、最後に『短歌造型論』という本を求めた。『短歌造型論』とは、同時代、短歌ジャーナリズムを牽引していた『短歌研究』編集長・木村捨録の著書である。木村と石牟礼との関係は、先行研究において焦点に据えられなかったものだが、本発表では、この関係に注目することによって、木村、あるいは時代が求めた短歌の〈現代性〉を、いかに石牟礼が獲得したのかを追究した。例えば木村は、「アララギ」的なものを否定的媒介としつつ、シュルレアリスムに振り切れすぎない新しい短歌のポジションを指し示す。また、木村は、〈新歌人集団〉の一人、歌人の大野誠夫の「虚構短歌」を肯定的に述べる。「虚構短歌」とは、先にみた石牟礼のエッセイの言葉、すなわち「立体的イメージ」とその動きのある「展開」を短歌に求める石牟礼の言葉に対応するものとして捉えることができる。また、東京在住の木村や埼玉在住の大野が主宰する歌誌に石牟礼が短歌を発表している事実もあり、その実作には明らかに、木村や

大野が求めるものとの近さを見出せる。さらにこのほかにも、1956年に石牟礼が『短歌研究』に発表した短歌は、同時代「女人の短歌」、とりわけ葛原妙子、森岡貞香、中城ふみ子らの短歌との関係を補助線とすると、戦後女性の短歌制作の特異性をみる観点からもとらえられるようになる。ローカリティも含め、〈中央〉が求める〈現代性〉を巧みに再現する、その文学的技術を身につけるプロセスを石牟礼の短歌制作に指摘すること、また、その内容において、同時代女性歌人たちの短歌を参照し、女性表象を刷新しようとする石牟礼の創造性をみること。これらの観点そのものが、これまでに採られることのなかったもので、この点に依拠すれば、同時代の〈現代短歌〉を踏まえて、石牟礼の短歌を読み直すことができるようになる。

最後に、本発表を踏まえた今後の課題を述べておく。1950年代半ば、新人発掘を開始した『短歌研究』は、地方在住の歌人ネットワークを形成しようとし、さらに地方在住の者にセルフ・オリエンタリズムを要請する傾向もあった。そこで石牟礼は「海」に生きる女性を、「われ」を主語として短歌に描き出す。同時期に石牟礼は、谷川雁と出遭い、『サークル村』にも作品を発表する。地方の文化運動との関わりのなかで、「ふるさと」としての水俣を再発見する時期に、中央歌壇誌でも土着的な女性像を描くようになる石牟礼道子の短歌。これをいかに意味づけることができるのか。本発表の先に、この問いに応じた検証が課題として残されている。

第 20 回学術研究会研究発表概要

亞書の謎

—— 読めない本に振り回された図書館 ——

安 形 輝

2015 年 2 月頃より Amazon に「亞書」という高額な資料群が通し番号を付与され、大量に並んでいる状態になっていた。

発表者は 2015 年 10 月 23 日に共同研究会合にて同僚に「亞書」の存在を教えてもらった。この「亞書」群の著者はすべて「アレクサンドル・ミヤスコフスキー」であるが Google 検索などでも情報はほとんど出てこない状況であった。出版社はすべて「ユダ書房」である。「亞書」の数ページがインターネット上で見られる状態であったが、解読できない本として紹介されていた。発表者は未解読文書に関する研究も行なった経験があったため、解読可能性について分析を試みた。ギリシャ文字やラテン文字が使われているが、機械翻訳でギリシャ語、ラテン語翻訳をしても意味が通らない文章が出てくるのみであった。文字の出現頻度はジップの法則には従わず、自然言語的な特徴をあまり有さない文書であった。

自然言語処理の面からの分析はうまく行かなかったため、出版社として名前がでてきた「ユダ書房」、さらに同じ住所にある「りすの書房」「木曜社」を調べることにした。すでに調べ始めた時点で公式サイトやその他の情報は消えつつある状態にあったが、検索エンジンのキャッシュやインターネット・アーカイブを活用し、入手できた情報はできるだけアーカイブした。「りすの書房」の公式サイトで公開されていた損益計算書によれば、2014 年に 400 万円を超える収入があったこと、会社の登記簿によれば、2013

年に設立された会社であること、「ユダ書房」「木曜社」などはすべて「りすの書房」の屋号であることが判明した。また、「りすの書房」に関わっている「入水そと」の消えてしまったブログには、多くの著者や出版社が関わっているように見えるが、すべて一人で出版していることへの言及があった。

「りすの書房」は「亜書」の他に「言語別聖書集成」という高額かつ多巻もののシリーズを出版しており、「亜書」と同様、公式サイトではまったく言及がないことも判明した。「言語別聖書集成」は2014年7月から12月にかけて刊行され、NDL-OPACには全132巻登録されていた。一冊2万円から10万円を超えるものまであった。「亜書」と「言語別聖書集成」で、NDL-OPACへ登録されていた書誌データからは、合計金額は11,746,580円であった。Amazon.co.jpにも大量の巻数、在庫はどれも1点という形で登録されていた。各国語版聖書は多くの場合、著作権が切れた状態でテキストデータがインターネット上に公開されていることが多く、それらを印刷したものであった。つまり、「言語別聖書集成」は100巻を超えるシリーズであるが、資料的価値はほぼゼロと言える。

「亜書」「言語別聖書集成」はどのような意図で出版されたものなのか、明らかではない。ただし、「亜書」「言語別聖書集成」は非常に多くの巻数があるにも関わらず、少なくともISBNを取得しており、国立国会図書館にすべてが納本されていることが判明した。納本制度は日本で出版された出版物はすべて国立国会図書館に収める義務があるという制度である。納本制度には弱小の出版社を守るために、代償金制度が付随している。代償金制度は原則として小売価格の5割+送料を納本のさいに国会図書館が出版社に支払う制度であり、請求すれば基本的には支払われるものである。前述のように「亜書」「言語別聖書集成」の合計金額は1,000万円強であり、その5割である500万円強が「りすの書房」に支払われたことになる。産経新聞の2015年11月2日付の記事によれば「りすの書房」に支払われた代償金の合計金額は621万7,884円であった。

「亞書」「言語別聖書集成」の出版の目的が国立国会図書館の代償金を得ることが目的であったと考えられる根拠として以下のようなことを考えることができる。

- ・存在の不自然さ

需要がない高額の高額のもの出版を行っている。高額の高額ものは代償金の金額も高額になる。

- ・広報の不自然さ

弱小の出版社のシリーズにも関わらず、ISBN への登録、Amazon への登録、国会図書館への納本などはきちんと行っている。一方で、公式サイトでは言及がない。

- ・経営の不自然さ

2014 年売上高のほとんどは「言語別聖書集成」の代償金である。売上の大半が国立国会図書館の代償金である点は出版社の経営として不自然である。

- ・「言語別聖書集成」のページと価格

「言語別聖書集成」のページ単価は 2014 年 7 月から 12 月にかけて 1.3 倍と不自然な高騰を続けている。

その後、テレビ、新聞報道等で話題になったところで 2015 年 12 月 8 日に「りすの書房」は解散公告を出した。国立国会図書館は債権請求の期限ギリギリの 2 月 2 日に「亞書」に関する代償金については返金請求を行い、136 万円の返金が行われた。しかしながら、金額的にはより大きな「言語別聖書集成」については返金請求も行われず、未だに国会図書館の書架に並んだままとされている。

参考文献

安形輝・安形麻理. 文書クラスタリングによる未解読文書の解読可能性の判定 — ヴォイニッチ写本の事例. Library and Information Science, No.61, 2009, pp.1-23.

アクティブ・ラーニングを促進する 学習環境づくりと授業支援の実践

— 千葉大学アカデミック・リンクでの事例を中心に —

小 野 永 貴

1. 本講演の概要および背景

近年、高等教育および中等教育の双方において、アクティブ・ラーニングの導入に注目が高まっている。効果的なアクティブ・ラーニングの促進には、授業手法の改善のみならず、教員に対する支援体制や学生の学習環境構築も必要となる。筆者らは、複数のプロジェクトへの関与を通してこの実現を図る研究および実践を行ってきた。

例えば、2015 年から科学研究費助成事業により実施している個人研究（JSPS 科研費 JP15K20916）では、初等中等教育の授業向上を支援する施策として、学習指導案の横断検索システムの研究開発を行っている。学習指導案とは、小・中・高等学校の教員が日常的に作成する授業の計画書であり、校種や教科、単元が類似する学習指導案を相互に共有して参照できれば、授業向上に役立てられると考えられる。しかし現状は、都道府県や市区町村の教育センター単位で蓄積されており、自治体を越えた共有が実現されていないため、この課題を解決する横断検索システムの研究開発を行っている。

高等教育における実践としては、筆者が所属する千葉大学アカデミック・リンク・センターにおいて、主に教養教育段階の学部学生を支援するアクティブ・ラーニング環境の構築が、組織的に行われてきた。本稿では以下に、筆者が同センターの一構成員として従事してきた千葉大学の取り組みについて、その活動概略や評価などの全体像を総括的に紹介する。

2. 千葉大学アカデミック・リンクの概要

アカデミック・リンクとは、「考える学生」の創造を目指す千葉大学の学習コンセプトにつけられた名称である。附属図書館、総合メディア基盤センター（現・統合情報センター）、普遍教育センター（現・全学教育センター）が協力し、2011年から取り組みを開始した。“学習とコンテンツの近接による能動的学習の実現”を目指し、特にその中心的な展開の場として附属図書館西千葉本館が位置付けられた。従来の静寂型図書館から、アクティブ・ラーニングを支援する図書館への転換を図り、建物の増改築が行われた。また、これらの場で展開するサービスや空間の研究開発および実施成果の分析調査等を行う部門として、アカデミック・リンク・センターが設置された。これらの学内部局の教職・職員が横断的に連携し、学生の能動的学習を支援する様々な施策が始まった。

3. 多様な学習スタイルを支える学習空間の展開

増改築後の新しい附属図書館本館は、4つの建物から構成された。L棟＝黙考する図書館、K棟＝知識が眠る図書館、N棟＝対話する図書館、I棟＝研究・発信する図書館と、棟ごとにコンセプトが明確に分かれ、設置されている什器や空間設計も異なっている。エントランスを入ってすぐのN棟には、可動式の机椅子・ホワイトボードが設置されたコミュニケーションエリアや、複数人で囲める大型モニタを接続したPCが設置されているグループワークエリアがあり、学生自身が希望する学習形態に応じて適切な空間を選べる。また、これらの空間は開放的なつくりとなっており、個人用の学習デスクや個人PC席とも隣接しているため、複数人での学習形態と個人での学習形態をシームレスに行き来できる。さらに、これらの空間の両端には、ブックツリーと称した“魅せる書架”が配置されており、各空間での学習時に利用されやすい資料を別置（日本十進分類法に従って排架する一般的な書架とは別に、特定のテーマや分け方によって並べること）している。

そのほか、N棟にはガラス壁で区切られた予約制のグループ学習室や、図書館前のウッドデッキと一体的に利用できるプレゼンテーションスペースなどが用意されている。プレゼンテーションスペースでは、授業や卒業研究などの発表会や、センターが主催するランチセミナーが頻繁に開催されている。

一方、K棟には日本十進分類に沿って排列された書架を中心として、比較的静かに学習したい学生向けの座席が書架の周囲に配置されている。さらに完全な静寂で学習したい学生は、L棟まで進むと静寂閲覧室を利用できる。静寂閲覧室ではキーボードを有するPCの利用も認められておらず、タッチパネルにより無音で入力できるタブレットのみ使用することができる。このように、音環境の点でも各建物がシームレスに連続しており、学生はその時々学習スタイルの希望に応じて最適な場を選択できる。

4. 学習支援・授業支援の実践

什器や空間、図書を整備するだけでは、学生の学習ニーズへ十分に答えられたとはいえない。学生が学習の過程で困難な場面に遭遇した際に、円滑に援助を求められる人間の存在も重要な学習資源となりうる。そこで、N棟コミュニケーションエリアに隣接して、学習支援デスクを設置している。学習支援デスクは、大学院生のスチューデント・アシスタント（以下、SAと略す）が在席する「分野別学習相談」、図書館職員が資料や文献探しの相談にのる「調べ物相談（レファレンスサービス）」、教員が専門的な相談や大学生生活全般について相談にのる「オフィスアワー」の3種類から成る。これにより、この空間で学習をすれば困りごとが発生しても最適な誰かに相談できる、という安心感をもたらしている。また、質問を待ち受けるのみならず、レポート作成やプレゼンテーションに関するセミナーを大学院生のSAが主催したり、図書館での情報探索手法を学んでもらうための体験型ライブラリーツアーを学部生のSAが実施するなど、プッシュ型の人的支援の企画も盛んに行われている。

そのほか、教育コンテンツの制作支援も重点的に行われている。学生のアクティブ・ラーニングを促進するためには、それに資する良質な教材の制作が不可欠である。しかし、今日の大学教員は多忙につき、新たな教材をゼロから構築することは容易ではない。そこで、プレゼンテーションスペースやセミナー室に収録装置を設置し、授業を収録して低コストで動画教材化できる環境を整備している。オンラインで受講生へ動画等の教材を配布するためのLMS（学習管理システム）も整備し、その利用方法等の技術に関する相談デスクを図書館内に設けている。なお、そのデスクに在席しているのは、技術支援担当のSAである。

このように、学生のSAは3種類（学習支援担当・技術支援担当・図書館活動支援担当）に分かれており、この活動に参加すること自体が「自分たちの学習環境を自分たちで良くしていく」という学びに繋がっている。教員・職員・学生が一体となった組織体制を構築することで、教職協働・学生協働の双方を日常的に実践している。

以上の通り、「学習空間」「人的支援」「コンテンツ」という3つの軸のなかで多様な施策を行い、学生の日常的な学習プロセスにおけるあらゆる段階を支援できるよう試みてきた。

5. 学習状況を検証する多様なデータ収集・分析の試み

前述のような試みが、学生のアクティブ・ラーニングの支援として真に貢献できているのかどうか、評価は重要である。近年は大学教育全般においてIR（Institutional Research）への注目が高まっており、学内の様々なデータに基づいた多角的な分析が求められている。特に本実践のような複合的な取り組みの場合、単一の手法で成果を評価できるものではない。そこで、アカデミック・リンク・センターが中心となり、多数な手法で分析調査を実施してきた。例えば、全学的なアンケートによる学習状況の調査、フォーカスグループインタビューによる学習プロセスの解明、図書館内の赤外線センサーの通過記録集計、非接触ICタグによる館内資料閲覧状況

の分析、ビーコン端末を用いた利用者の館内動線調査、などがあげられる。各調査の詳細な手法や結果は、アカデミック・リンク・センターの各種報告書や学会発表・論文投稿等により対外発信しており、他大学における実践にも貢献できるよう積極的に情報公開している。

6. おわりに

本報告では、千葉大学アカデミック・リンク・センターでの実践を中心に、大学生のアクティブ・ラーニングを促進するための学習環境づくりと授業支援、およびその評価手法の実例を紹介した。現代の大学生の学習スタイルは多岐にわたっており、一連の学習プロセスを支援するためには数多くの施策が必要となる。一方で、これらの施策を円滑に実施するためには、専門的な職員の存在が不可欠であり、教育や学習支援に関する大学職員の能力養成が課題となる。そこで、千葉大学アカデミック・リンク・センターは、平成 27 年度より教育関係共同利用拠点に認定され、「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム」を開始した。教育・学修支援に従事する職員に期待される能力を整理し、「教育・学修支援の専門性に必要な能力ループリック（試案）」を開発のうえ、それに即した履修証明プログラムを展開している。これらの能力を身につけた人材が全国の大学現場へ輩出され、いかに専門職としてのキャリアパスを見出すか、今後の動向が注目される。

『トリスタンとイズー』におけるドラゴン

— 女性へのイニシエーション —

小 川 直 之

1. 世界に遍在するドラゴン伝説

洋の東西を問わず、各民族の想像力が産みだした最古の怪物に、ドラゴンあるいは龍がある。想像上の獣ゆえに、時代と場所によって形態は多様であるが、これを最強の獣として登場させている民話・説話・物語は枚挙にいとまがない。本邦では南方熊楠が『十二支考』において扱ったように、スサノオノミコトによるヤマタノオロチ退治や、藤原秀郷こと俵藤太のムカデ退治が有名である。

ヨーロッパ世界におけるドラゴンは、つねに禍々しい怪獣だったわけではない。ギリシャ語の「ドラコ」が「見る」を意味したように、「警戒」こそドラゴンの得意とするところであり、彼に打ってつけの役柄は貴重な物を「見張る」ことであった。ギリシャ神話で、イアソン率いるアルゴ号の英雄たちが奪おうしたのは、ドラゴンに守られた金羊毛であったことを思い出せばよい。また、中世のフランス西部にひろく伝わった伝説によれば、当地のリュジニャン家に繁栄をもたらし、これをフランス屈指の名家にまで押し上げたのは、上半身が絶世の美女、下半身は醜いドラゴンという怪物メリュジースであった。

2. 中世キリスト教的ドラゴン伝説の特徴

しかしながら、中世キリスト教世界を概観すれば、豊饒のドラゴンというメリュジースの両義性はむしろ例外的である。中世ヨーロッパのドラゴンは、端的に「悪」の象徴であった。「創世記」の楽園追放の物語は、蛇＝ドラゴンの姿をした悪魔こそ、イヴを誘惑して墮落させ、原罪の起源を

つくった張本人であると教え、「ヨハネの黙示録」(第十二章)は、教会を脅かすレッド・ドラゴンを登場させている。キリスト教徒にとって、ドラゴンは悪魔の化身として、最悪にして最強の存在であり、キリスト教における英雄、すなわち聖人あるいは騎士によって退治されるべき対象であった。つまり、聖人や騎士にとってドラゴンを制することは、通過儀礼(initiation)の意義をもったのである。

そして、キリスト教の聖人伝説は、聖人によるドラゴン退治という単純なエピソードに満足することなく、その結構をギリシャ神話の英雄物語に求めた。ペルセウスの海獣退治は、退治することじたいが目的ではなく、生贄にされていたエチオピアの姫アンドロメダを救うためだった。同様に、聖ゲオルギウス(フランス語読みはジョルジュ、英語読みでジョージ)も、怪物に囚われの美女を解放するためドラゴンを成敗する。ここに、「若き英雄／騎士／聖人が、悪魔／ドラゴン／怪物によって危難に遭っている乙女を、剣によって救出する」という主題が確立する。これはヨーロッパ絵画においてもグランド・テーマとなり、無名画家たちによる聖人伝の写本挿絵はもとより、ラファエロやルーベンスら、あまたの巨匠たちの名画を生むことになる。

3. 中世フランス文学の代表的ドラゴン・スレイヤー、トリスタン

『トリスタンとイゾー(ドイツ語読みでイゾルデ)』においては、ドラゴン退治のエピソードが、主人公トリスタンを長大な物語の核心に導入する(initiate)恰好となっている。この挿話は、「トリスタンもの」における最古のフランス語バージョンのひとつである、トマによる作品(1270年代)にふくまれていたと推定される。トマのテキストを伝えている写本は断片的で、この挿話に相当する部分は失われてしまっているが、13世紀末にゴットフリート・フォン・シュトラースブルクによってドイツ語に翻訳されており、これによって当該箇所についても大概を知ることができる。

トリスタンは、叔父であるマルク王の妃として、敵国アイルランド王の

姫イザーを連れ帰るため海を渡る。時あたかもアイルランドの国土はドラゴンによって荒廃しており、王は怪物を葬った者に娘をあたえるとの触れを出したところであった。トリスタンはみごとこれを成し遂げ、偉業のあかしにドラゴンの舌を切り取るが、その毒に当たり昏倒する。瀕死の彼を介抱し、恢復させたのがイザーである。そして、トリスタンとイザーは、運命のいたずらから、相思相愛を必至とする媚薬をあおり、情熱的な性愛によって結ばれる。以降、ゴットフリートないしはトマは、主人公の騎士としての武勇には大きな関心をしめさず、宿命の愛に翻弄されるトリスタンを語る。

このドラゴン・スレイヤーは、マルク王妃となったイザーとの不倫に身を焦がし、彼女をともなってモロワの森に逃げ隠れ、ひとり、追放の身となったのち、宮廷にもどったイザーに会うため必死の覚悟で帰国する。さらに、愛人を忘れるために、同名の女性と結婚したものの、最愛のひとへの思い捨てがたく、いくさで重症を負うや彼女を呼び寄せる。しかし、妻の嫉妬により、愛するひとの到着まえに落命する。

トリスタンは、愛に翻弄される騎士である。そして、トリスタン物語においては、女を愛し、女に愛される男になるための通過儀礼としてドラゴン退治のエピソードが機能しているといえる。

ドラゴン退治は、より大きなテーマに内包されつつ、現代の文学にも生きつづけている。児童文学を齊藤洋（日本）に代表させれば、『テオバルトの騎士道入門』（1991年）の主人公である若殿は、立派な騎士になるため、実在しないドラゴンの「涙」を求めて遍歴の旅をする。英国のカズオ・イシグロの『忘れられた巨人』（2015年）は、その吐息によって人々の記憶を忘却の彼方に追いやるドラゴンを葬ろうとする騎士の物語である。

ドラゴンを退治することによって、男はあたらしい世界に足を踏み入れる。あるいは、失われた世界をとりもどす。最古の怪獣は、象徴的な存在としての役割をいまだ担っているのである。

参考文献 (抄)

新倉俊一・神沢栄三・天沢退二郎訳『フランス中世文学集1 信仰と愛と』(白水社)、1990年。

J・ベディエ編、佐藤輝夫訳『トリスタン・イズー物語』(岩波文庫)、1985年。

ゴットフリート・フォン・シュートラスブルク著、石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』(郁文堂)、1983年(改訂4版)。

A・コルバン／J・J・クルティエヌ／G・ヴィガレロ監修、鷺見洋一監訳『男らしさの歴史1 男らしさの創出——古代から啓蒙時代まで』(藤原書店)、2016年。

南方熊楠著『十二支考 上』(岩波文庫)、1994年。

ヤコブス・デ・ウォラギネ著、前田敬作・山口裕訳『黄金伝説2』(平凡社ライブラリー)、2006年。

ドニ・ド・ルージュモン著、鈴木健郎・川村克己訳『愛について——エロスとアガベ 上』(平凡社ライブラリー)、1993年。

尾形希和子著『教会の怪物たち ロマネスクの図像学』(講談社選書メチエ)、2013年。

Les Tristan en vers, ed. J. Ch. Payen, Classiques Garnier, 1974.

Gottfried de Strasbourg, *Tristan, traduit du moyen haut allemand pour la première fois en vers assonancés par Louis Gravigny*, Kümmerle, 2008.

Bernard Ribémont et Carine Vilot, *Caractères et Métamorphoses du dragon des origines : du méchant au gentil*, H. Champion, 2004.